

編集室から

隔月レギュラー陣の江川さんが記事に取り上げられていますが、最近のAIの進化には驚かされ続けています。少し前まで、まともな回答を得るために、ノウハウが開発され、それ自体が研修題材になっていたのですが、今では僅かばかりの配慮で問い合わせても、中々な回答が返ってきて感心してしまうことがあります。

ただ、「その回答のレベルがどの程度あるかを判断できる能力」は引き続き必要です。そのため、その道の先導者・熟練された方々にAIの回答内容をお尋ねして、検証するという局面は、引き続き無くならないかもしれません。

さまざまな業界・業種・職種でヒトからAIへのシフトが起こるとされていますが、このAI回答の質を検証する能力は、どの世界でもある一定以上の域に達した人間でなければ、発揮できないものだと思います。

そうすると、成長中の人材はどうなるのでしょうか。彼らを安易に切ってしまうと次代の熟練者は現れては来ません。そうなってしまうと、AIからの回答は全知全能と評価するしか無くなり、人類の叡智は、それ以前の水準で停止してしまいかねません。

かといって、圧倒的な時短・効率化をもたらすAIと並行して、ヒトを育てる資金・待ち時間といった社会的コストを払い続ける余裕があるのか…。これも頭の痛い問題です。

一方で、未知の土地への観光スポットやコースを訊ねて、複数の提案から、興味あるものについて、壁打ちを重ね、深掘りをするといった使い方には、検証は要りませんから、気楽に向き合えるアプローチの一つとなりそうです。

取り敢えず使い始めないと先が見えない世界。それがAIとの共存社会のようです。

表紙写真は、被災後1年2ヶ月で修復なった集落の鳥居と、春祭の幟です。(は)



このニュースは、地域計画に携わる若手の技術者の参考となることを目的に発行を始めました。

その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2026/03

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2026/03

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

弥生



能登 薬師の里にて
by hama

**復興するぞ！
能登・北陸**

前回は、セルフメディケーションの話をしました。外来診療と処方箋による投薬を減らすために「軽い身体の不調は薬局のクスリを買って自分で治しなさい」という流れが生まれています。この流れに最も乗りそうなのはウィルス性上気道炎、いわゆる風邪です。

◎ これまでも、風邪薬は多く市販されてきました。「ルル」とか「パブロン」などが馴染みでしょう。これらは総合感冒薬と呼ばれていますが、実は様々な成分の薬剤が害のない程度に少量ずつ混ぜられているだけです。PL顆粒も同様です。そもそもウィルスに対して、我々人間は有効な薬剤をほとんど持ち合わせてはいません。日本でインフルエンザウィルスに対して一般的に使われるタミフルですが、海外ではよほど重症化のリスクが高くない限り使われません。その結果、全世界で使われるタミフルの七十五%が日本で処方されています。私が処方する範囲内で明らかに有効だと手応えを感じる抗ウィルス薬は、アシクロビルなどヘルペス帯状疱疹などに対する薬剤くらいです。風邪によく効くロキソニンも、ウィルスを減らすのではありません。単に、ウィルスで生じる熱や痛みなどの不快な症状を抑制しているだけです。ウィルスの消滅は、ヒトの免疫力にかかっています。

◎ 蛇足ですが、いわゆる風邪に対して点滴をした

り抗生剤を処方したりするのも日本だけです。抗生剤は、細菌感染にしか効果はありません。ウィルス感染に抗生剤を使うことは、腸内細菌叢を乱したり抗生剤に耐性を持つ細菌を増やしたりする原因になります。抵抗力が著しく低下してウィルス感染から容易に細菌感染へと進行してしまふ可能性が高い場合にも必要で、それ以外は厳に慎むべきことです。点滴も水分摂取が出来ない場合にだけ行うことで、歩いて外来受診できる人には必要ありません。

◎ 話を元に戻します。いわゆる風邪に対してセルフメディケーションを行うことに、私は反対ではありません。むしろ外来で診察しながら、OTC(Over The Counter: 薬局のカウンター越しに処方箋なしで買える薬でロキソニンやアレグラを買えば受診は不要なものになあと感じる事がほとんどです。これからは、OTC利用のハードルは着実に低くなっていくと予想されます。そうなるに、薬剤に関する適切なアドバイスをしてくれる薬剤師の存在が重要になってきます。症状や体調の相談ができて、自分の体質まで知ってくれている頼れる薬剤師ができれば



【プロフィール】
いがき としお(金沢大学北濱寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とっても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松でヌクヌクしています。)

濱の起業塾 八十二 『地域経営の視点』

「創造力は想像力を越えない」という法則がある聞いたことがある。平たく言い直すと、「頭に思い描く(想像する)ことができないものは、生み出す(創造する)ことができない」という説である。

地域に何か新しいもの・ことを導入して(新規社会事業の起業も含む)再生させようとする場合、この法則が壁となって立ちはだかる場合がある。

公益性が高い事業は、「みんなのため」が強い。したがって、比較的賛同が得られやすい。

一方で、道の駅などの社会事業は、公益性がややわかりにくく、共益的側面が表に出やすいため、賛同の輪が拡がりにくいことがあり、執行部(行政)と議会との関係性がキーとなってくる。過去に「モノをやり過ぎてしまった自治体によっては、住民から「どうせまた、建設業界の利益になるだけで、赤字まみれになる」と想像されてしまつと、事業計画自体が頓挫(創造できなす)するようになる。

個人事業を含め、私企業では経営者が強力なリーダーシップを発揮して想像力を組織に伝え、共有することで、創造力につなげていくことができる。

社会事業の起業に際しても、個人の発想(想像力)によって、個人事業として立ち上げられたものが、実を結び例は、地域の合意形成よりも、「実際にやってみせる」ことが優先されるため、成果が可視化されやすく、結果的に合意が形成されることに拠っている。

行政主導で道の駅などの地域再生事業を進める場合、どうしても民主的なプロセスを経なければならぬ点、悩ましい。

地域の合意を形成する必要から、公益(行政の本来業務)から共益へのアプローチには、膨大な時間と資金が要る。首長の確たる志に基づくリーダーシップと、担当部局の根気よい活動により、地域に豊かな想像力の種を植えていく地道なアプローチが重要であると痛感している。

今回は、就職活動における重要な書類の「エントリーシート（ES）」の作成に当たり、学生が生成AIをフル活用しており、大学の教職員等の指導・支援に変革が迫られている実情を指摘した。

採用側も当然に変革が迫られている。あらゆるESが生成AIで作成され、内容や構成が大差なく揃えられることで、ESを元にした書類選考が困難になる。つまりは、一定水準に達しないものを落とす「足切り」がやりにくくなるのだ。

その結果、選考が「学歴偏重」へと回帰する動きを指摘する論者もいる。また、足切りを減らし「短いリモート面談」を繰り返すとともに、ここでは半構造化面接や非構造化面接^{注1}の傾向を強めていると聞く。さらには早期の段階から「実践的課題」や「ロールプレイ」を課すような選考手法も、既に私のまわりで目立ってきている。生成AIの活用による付け焼き刃を排除し、真の実力を見極めるには、フォーマット化された書類ではなくアドリブによる対話や思考と記述の深度がカギとなるのだろう。このような採用側の工夫とその適切な運用には、従来よりもコストがかかることが推測され、利益を圧迫するとともに、採用プロセスにおいて今後更なる変革を促すことにもつながるだろう。

ところで、生成AIの活用の段階は、次のように類型化することができるのではないか。

- (1)ヒトの思考及びその記述を代替し、質の均質化や時間短縮等を図るもので、生成AIのインパクトは「efficiency：効率化」である。
- (2)ヒトの思考及びその記述に、量的な拡張や質的な高度化、その結果としての付加価値の向上を図るもので、生成AIの活用により「Added value：付加価値化」が生じる。
- (3)ヒトの思考からその記述に至るプロセスを抜本的に見直させるもので、生成AIは「transform：変革」を迫り促す。AX^{注2}とも称される。

生成AIが就活現場に迫っているのは、まずは(1)、(2)であったが、今はこれらの段階があっという間に過ぎ去りつつあり、あらゆる関係者に(3)への対応を突きつけつつある状況だと言える。

注1：事前に質問項目や評価基準を決めて臨むのが「構造化面接」で、それらを決めず、会話の流れに合わせて面接官が自由に質問する形式が「非構造化面接」。その中間が「半構造化面接」。

注2：生成AIによる業務変革（AI Transformation）。

地元の役場を早期退職して、早3年が経過しようとしています。退職のきっかけとなった、消滅寸前の集落に暮らす両親の介護、離れた実家との2地域居住、そして地域再生…そんな想定・予定は退職後わずか5か月でもろくも崩れ、今では流されるがまま、求められるがままに、母親の生まれたこの地域に関わっています。

役場入庁後25年もの間、内部管理・総務系（そのうち人事担当歴が半分）の経験しかなかった自分が、退職前の5年間産業振興・過疎対策に関わることになりましたが、当時から地域の方には「役場はあてにしたらアカンで」と伝えていました。これ、この部分だけ切り取ると、行政を批判しているように聞こえますがそうではありません。以前この寄稿でも申し上げましたが、過疎地域でよくありがちな「他者依存（かつ他者批判）」の文化は当地も例外ではありませんでした（過去形になりつつあります）。

どうしても行政は予算・補助金の切れ目、人事異動の切れ目、首長の交代など、流れがぶつ切れになってしまいがちで、なかなか「想い」が繋がり連鎖していきません（企業であれ大学であれ同じことです）。ですので、ぶどう山椒の振興について町と龍谷大学が包括連携協定を結んだ際も、地域・農家との間にいつまでも行政が介在すべきではないと考えていました。しかし、人口流出と高齢化が進む山間地域では、他者依存の文化を溶かし自律を促そうにも、すでに体力が残されていません。ならばどうすべきか。地域側に立ち、地域のコーディネーター、プロデューサー的な役割を担う組織が必要なのではないか。地域全体を一つの企業と仮定すれば、そこには人事部的存在が必要なのではないか。中間支援組織、弊社しろにし設立のきっかけはここにあります。

商標登録が叶った“地域維持レスキュー®”を中心とした取り組みを進めていくなか、設立以来なかなか一歩踏み出せていなかった農業系の財団法人、地盤沈下を起こしはじめていた観光系の財団法人の2社からお声がけをいただくこととなります。弊社や移住者のような新参加者がいきなり主導権を握るのではなく、共に手を携えながら、時には引っ張り、時には後ろから支える。そんなチームプレイが、いまこの地に芽生えつつあります（あ、また人事的思考になってるww）

次号では、そんないまの動きをご紹介したいと思います。



筆者が携わる施設の一

『相模の国から ～大魔神のたび～』 エジプトへの旅 2025.12/19～28 @
茨城県境町 参与 溝口 久

古代エジプトにおいて、神殿に「これで完成」という終わりはなく、次の王はその手前に「新しい門」を造り、さらに次の王はその門の中に「新しい中庭」を造るいうように、外側へ付け足していくような形で増築が進んだ。当時の人々にとって神殿建設は単なる建設工事ではなく、「宇宙の秩序（マアト）を維持する儀式」だった。そのため、最初の施工期間を終えた後も、国が豊かである証として「常にどこかで工事が行われている状態」が2000年も続いたのである。

現在は柱のみが建っているが、当時は巨大な石の板で完全に覆われた、暗く神秘的な空間だった。

屋根で完全に覆ってしまうと神殿の内部は真っ暗になってしまうので、中央通路にある柱を両脇の柱よりも数メートル高く造り、高い屋根と低い屋根の間にできた垂直の隙間に石を格子状に削った窓（クリアストリー）をはめ込んだ。ここから差し込む一筋の光が、刻まれた壁画や巨大な柱をドラマチックに照らし出し、神の存在を感じさせる幻想的な空間を作り出していたのだ。

現在、多くの神殿で屋根が失われているのには、主に3つの理由がある。①地震。②後の時代の人々が、別の建物を建てるために「切り出し済みの石材」として持ち去ってしまった。③神殿が砂に埋もれていた長い年月の間、屋根に積もった膨大な砂の重みで押し潰されてしまった。

ここからは「動くホテル」、ナイル川クルーズの旅が始まる。ルクソールからアスワンまで、4泊5日の船旅だ。翌日は「王家の谷」に向かう。船は停泊したままになる。

ファラオの墓となればピラミッドだが、あまりにも目立ちすぎたため建設中から墓泥棒に狙われたため、新王国時代のファラオたちはピラミッドを建てることをやめ、人里離れた断崖絶壁の谷間に墓を隠して造ることにした。この王家の谷には、現在までに60以上の墓が発見されている。その構造は地表から岩山を深く斜め下へと掘り進めたトンネル状になっている。長いものでは100m以上も地中深くへと続き、いくつもの小部屋や前室を経て、最深部の「玄室」に王の棺が安置された。墓の内部は外気や日光から遮断されていたため、3000年前の極彩色を観ることができる。死後の世界を旅するための呪文を記した「死者の書」や、神々に導かれる王の姿が壁面を埋め尽くしている。王家の谷を世界的に有名にしたのは、1922年のハワード・カーターによる「ツタンカーメン王の墓」の発見だ。3000年以上の時を経て、黄金のマスクをはじめと

する5000点以上の秘宝が「手つかずの状態」で見つかったのだ。結局、王家の谷も盗掘にあっているが、ツタンカーメンのみ未盗掘だった。それは後世に造られた別の王（ラムセス6世）の墓の建設時に出た土砂に埋もれ、入り口が完全に隠されてしまったことによる。18歳前後で亡くなった「若き無名の王」の墓が、皮肉にもエジプト史上最大の発見となり、現代で最も有名なファラオとなっている。

次は「王家の谷」のすぐ近く、断崖絶壁を背にして建つハトシェプスト女王葬祭殿に向かった。ここは墓ではなく、亡くなり神となったファラオを祀る儀式のための場所だ。

エジプト初の女性ファラオのハトシェプスト（紀元前1500年頃）によって建てられた。彼女は本来、摂政として幼い王を支える立場だったが、自らファラオを名乗り、約20年にわたってエジプトを統治した。

三層の広いテラスに水平線を強調した列柱が今の建築にも繋がる。建物がそびえ立つのではなく、背後の崖から彫り出されたかのように見える設計は、古代エジプト建築の最高傑作の一つと言われている。

エジプトに行くと言ったら、何人かに「エジプトは危険じゃないのか、大丈夫か？」と言われた。

1997年11月17日の午前にまさにここハトシェプスト女王葬祭殿で起きた「ルクソール事件」の記憶があるからだろう。イスラム過激国家樹立を目指す武装集団が、神殿を見学中だった外国人観光客を突如として襲撃した。「観光収入」を断ち政府を弱体化させることを狙ったものだ。これにより日本人観光客10名を含む、計62名という尊い命が失われた。

エジプトにとって観光は外貨獲得の命綱である。これを機に、「観光客に何かあれば国が終わる」という危機感から、今はバスに観光警察が乗り込み、遺跡入口のセキュリティが厳重になっている。（つづく）

